発表題目は以下の通り。

Martin Kraatz：Some Short Considerations in Advance

澤井　義次：The Significance of Materiality for Religious Studies（基調講演）

Jörg Lauster：The Materiality of Religion from a Philosophy of Religion Perspective

Christoph Elsas：Matter in Dualistic Concepts

深谷太清：Perspectives on the Body in Early Modern Japan

森下三郎：Displacing Belief from Ritual Practice

Ulrike Wagner-Rau：Materiality of Baptism. The Significance of Objects in Sacramental Practice

前マールブルク大学学長の歓迎の挨拶、飯降学長講演（17日夕刻：公開）

Michael Pye：Exhibiting Religion（基調講演）

梅谷昭範：The Matter and Meaning of Exhibiting the Tenrikyo Overseas Mission

堀内みどり：The Image of Kali and Ramakrishana's God-realization

Gerhard Marcel Martin：Materiality of Orthdox Icons

Edith Franke：The Religious Language of Objects: What Semar Says about the Religious Culture of Java

東馬場郁生：The Mirror as an Embodiment of the Sared in Japan: Shinto, Buddhism, and Christianity

島田勝巳：The Icon and the Gaze in Nicholas of Cusa's De visione dei

Bärbel Beinhauer-Köhler：Contextualizing Mosque Architecture: Aesthetics, Material Religion or Visual Culture?

岡田正彦：The Role of Architecture in the Study of Modern Japanese Religions

## 第60回伝道研究会（12月22日）「シンガポール出張所の文化活動」

伝道研究会ではこれまで、コンゴや中南米の天理教伝道、またアメリカスの日系宗教など取り上げてきたが、現在は「天理教海外伝道における文化活動」をテーマとし、実際に海外での伝道の現場で文化活動に携わっていた人たちを招き、活動の様子や課題、また布教伝道との関わりなどについて議論を行っている。

このテーマとしては6回目となる研究会では、シンガポール出張所の元所長である切貫元治氏（現ヨーロッパ・アフリカ課長）が、同出張所で展開されているさまざまな文化活動を紹介した。

はじめに、シンガポールの歴史や地理的な背景を概観し、戦後の天理教の同国への布教伝道の歴史、また東南アジアの布教拠点としてのシンガポール出張所（1972年）の設立の経緯について説明した。

シンガポールにおける天理教の文化活動は、天理大学柔道親善使節団の同国訪問（1969年）が契機となって始められた。そして、出張所設立後にとりかかった日本語教室や天理高校吹奏楽部の同国での公演（1975年）による音楽交流などで拍車がかかり、「天理文化センター」の設立（1976年）に至った。発表では、同センターにおける現在の活動やその規模、またその存在の法的な根拠や布教伝道との関わりについても言及。さらに、時代と共に移り変わる現地社会にどのように応えていくのか、あるいは運営経費に関する問題などにも触れ、それらを踏まえた今後の展望についても議論がなされた。（記：森洋明）

## 第12回「宗教と環境」研究会を開催（11月16日）

佐藤孝則

第12回目のテーマは「被災者ケアと宗教者の役割」で、最初に、上智大学教授で東京大学名誉教授の島薗進氏に、「被災者ケアと宗教者の役割 －寄り添い、連携することの力－」と題して発表していただいた。

はじめに、島薗氏は、「震災と宗教的・スピリチュアルなニーズ」について言及し、東日本大震災（2011年3月11日に発生）の津波で多くの命が失われた仙台市若林区荒浜地区で、4月1日、震災で亡くなった人たちのために読経していた5人の僧侶について紹介した。ほかにも、天理教や金光教などさまざまな宗教者や宗教教団が直ぐに被災地へ赴いたことについて紹介した。このような寄り添いと連携の行動が、結果として、社会と宗教界との関係に大きな変化をもたらしたことを強調した。

続いて、仙台市内に開設された宗教・宗派を超えた傾聴ボランティア「カフェ・デ・モンク（Café de Monk）」の活動についてふれ、宮城県栗原市の僧侶らが、同市の陶芸家の協力で陶製の握り地蔵「手のひら地蔵」を作っていることを紹介した。また、弔いから悲嘆ケアまで、一貫した切れ目のないご遺族に対する支援を行うことを目的に、仙台市内に「心の相談室」を設けたことも紹介した。さらに震災の翌年には、東北大に「臨床宗教師」の資格取得のための講座が開講されたことも紹介した。

また、「宗教者災害支援連絡会（宗援連）の活動」について言及し、実際におこなっている避難・疎開の受け入れ、被災地支援、心のケア、情報交換会などの取組みのほか、いくつかの課題についても紹介した。加えて、2014年4月6日、宗教者災害支援連絡会3周年記念シンポジウム「宗教と災害支援―3.11以後と今後―」を開催するなど、地道な活動だけではなく、さまざまな方面へ情報発信を続けていることも紹介した。

最後に、「ケアにおけるスピリチュアルな次元」についても言及し、ドイツの「マリア・フリーデンホスピス」で実践されている社会的、民族的な出自、宗教に関わらず全ての人が無条件に歓迎されている現状を紹介した。そして、日本ではスピリチュアルケアの領域が自立していかない現状、日本ではチャプレン制度が発達しなかった理由についても紹介した。

以上が島薗氏の発表内容で、おやさと研究所からは金子昭研究員が「天理教による東日本大震災の支援活動―緊急『支援』から復興『支縁』へ―」と題して発表した。